

文献紹介

平岡昭利 編

『地図で読み解く日本の地域変貌』

海青社 2008年11月 333頁 3,048円＋税

本書は日本各地から以下に示す111か所の地域を選定し、旧版地形図と現行地形図とを比較することを通して、地域の変貌を読み解いたものである。

北海道 札幌、函館、苫小牧、室蘭、余市、旭川、
富良野、稚内、帯広、釧路、標茶
東北 仙台、盛岡、青森、八戸、秋田、八郎潟
干拓地、山形、酒田、福島、郡山、いわ
き（小名浜）
関東 東京、八王子、多摩ニュータウン、横浜、
川崎、相模原、横須賀、三宅島、千葉、
浦安、松戸、九十九里浜、さいたま、川
口、水戸、つくば、石岡、日立、鹿島臨
海工業地域、宇都宮、前橋、高崎
中部 名古屋、一宮、豊田、豊橋、岐阜、浜松、
静岡、甲府、長野、岡谷、軽井沢、新潟、
長岡、富山、高岡、黒部川扇状地、砺波
平野、金沢、福井
近畿 大阪、堺、大和川、東大阪・大東、千里
丘陵、枚方、神戸、西宮、姫路、京都、
大津、奈良、天理、和歌山、津、四日市
中国・四国 広島、呉、福山、岡山、児島湾干拓
地、倉敷、水島工業地帯、山口、下関、
鳥取、松江、高松、徳島、鳴門、松山、
高知
九州 福岡、北九州、久留米、佐賀、有明海、
長崎、佐世保、大分、熊本、宮崎、鹿児
島、桜島、那覇、沖縄、与勝諸島、南大
東島

111の地域は都道府県庁所在地をはじめとする主要都市のほか、とくに著しい変貌を遂げた地域が選ばれている。これらのうち、北海道の屯田兵村や九十九里浜、黒部川扇状地や砺波平野、児島湾干拓地や有明海など、近世・近代日本の歴史地理を語る上で、欠くことのできない地域を網羅し

ていることは論を俟たないが、これらに加え、多摩ニュータウンや千里丘陵、鹿島臨海工業地域や水島工業地域、八郎潟干拓地など、住宅都市や工業地域の形成、大規模農地の造成など、戦後日本の地域変化を示す格好の事例も数多く含まれている。

本書の編者は、『地図で読む百年』シリーズ（古今書院刊、全10巻）の編者でもある平岡昭利氏である。各事例地域の解説は、編者を含めた86名によって分担されているが、いずれも、その地域にあって教鞭を執ったり、その地域を研究対象としているなど、個々の地域に深く関わり、熟知した地理学者が担当している。本書は、全10巻に及ぶ前書から事例地域を厳選し、いくつかの地域を新たに加えた上で、記述内容を必要最小限に簡略にして1冊にまとめたという点で、前書の「ダイジェスト版」とみなすこともできる。しかしながら、これを単なる「ダイジェスト版」とするのは、いささか早計であろう。なぜなら、本書には以下のような、工夫が凝らされているからである。

一点目は、現行地形図として世界測地系移行後に発行された、最新の地形図を使用するばかりでなく、2001年から2003年にかけて柏書房から『正式二万分一地形図集成』が復刻されたことに即応して、多くの都市で、旧版地形図として、この「正式二万分一地形図」が採用されていることである。具体的には、仙台、八王子、横浜、浦安、川口、前橋、高崎、岐阜、甲府、富山、高岡、福井、大阪、姫路、大津、奈良、天理、和歌山、津、呉、岡山、山口、下関、鳥取、高松、鳴門、松山、高知、久留米、佐賀、長崎、佐世保、熊本がこれに該当する。これは、我々が比較的手に取りやすい、『日本列島二万五千分の一地図集成』シリーズ（科学書院発行、全5冊）に所収されている図版よりも、大縮尺であることに加え、図版の印刷状態も良好なものが多い。そのため、上記の事例地域については、近代都市として変容を遂げつつも、江戸時代の名残を色濃くとどめていた、20世紀初頭の諸都市の形態や内部構造を、とくに明瞭に読み取ることができる。

二点目は、1,000語を超えるキーワードからなる索引が充実している点である。個々のキーワードには、固有名詞など、該当箇所が1地域のものも少なくない。しかしながら、該当箇所が多いキーワードの存在により、複数の地域に共通する地域変貌のキーワードが浮かび上がってくる。個々の地域の歴史的基盤を示すものとしては、城下町や宿場町、新田・新田開発など、また比較的新しい時代の地域変化を示すものとしては、工業都市・工業地帯・工業団地、中心市街地・中心商店街、空洞化、架橋、インターチェンジ、区画整理事業などがこれにあたる。

この索引に散りばめられたキーワードを手がかりにすれば、本書を単に111の地域を列挙した地誌書として読むばかりでなく、読者のレベルや関心に応じて、系統地理学的に読みを深めていくことが可能になるであろう。評者は、編者が「はしがき」において、本書を『『考える地理』への基本的書物』と位置づけた意図が、この点に反映されているように思えてならない。もとより、個々の執筆者の記述スタイルは、執筆者の個性や事例地域の特性に応じて様々であるから、本書の複数の地域を単に読み比べるだけでは、読者の欲求を即座に充たしてはくれないであろう。しかし、この点に関して、読者が物足りなさを感じたとするならば、そこにこそ読者が本書をきっかけに見識

を深めるべく、自学する余地が残されていると考えるべきであろう。

本書で取り上げられた個々の地域変貌誌を読み、高度経済成長期が現在へと繋がる「大変貌期」であったことを、改めて思い知らされる。昨今の大学生はもとより、これから教壇に立とうとする評者らの世代の地理学徒もまた、この「大変貌期」の後に生まれ育ち、変貌前の状況や変貌の過程を経験していない。歴史地理学が「過去」の地理を研究対象とする学問分野であることを踏まえれば、高度経済成長期は言うに及ばず、それ以降に生起している地域変化もまた、歴史地理学が取り組むべき課題の範疇に入りつつあるといえる。地域変貌という現象を人に説明したり、その意味を考えたりするにあたり、評者らの世代は、その変貌を肌で感じてきた世代に及ぶべくもない。しかしながら、そうであるからこそ、表象された地域の様態を記号化し、国土領域を網羅した地形図は、景観写真や映像資料など同様もしくはそれ以上に、その良き手がかりとなるであろう。本書は、歴史地理学を学び、考える上で興味深い日本全国の事例を網羅し、しかも、そのエッセンスを1冊の中に凝縮させた書物であり、それでいて価格設定はリーズナブルである。歴史地理学徒にとって「必携」の書物として、本書を紹介したい。

(清水克志)